

1.3.2 *Introduction and description of SMED*

Survey of Middle English Dialects 1290-1350(Kristensson 1967, 1987, 1995, 2001, 2002; 以下 *SMED*)に含まれている資料はイングランド全土をカバーしており、俗人臨時課税簿(LSR)から、あるいは特定の地域でそのような帳簿が不足している場合には類似の資料から抽出された。可能な地域であれば、*SMED* は 2 倍の地域を扱うため、それぞれの州からの異なる日付の 2 つの臨時課税簿を利用している。LSR は基本的にはラテン語の文書であるが、納税者や納税の記録であるため、また地方ごとに記録されているために、多量の俗語資料や人名・地名を含んでいる。俗人臨時税はほとんど国内全てにおいて徴収されていて、議会の承認によって修正されることがあった。したがってこの帳簿は正確に日付が書かれている。多くの場合、税の支払いは地元の役人によって記録されていた(Kristensson 1967: xii)。故にこの資料は、リストアップされている様々な名称の本当に地元の発音を明らかにすると考えられているのだ。Kristensson の調査結果は北部・中西部・中東部・南部方言の地域の素描であり、その素描は Kristensson の主目標を残している。提案された雛型は音韻論の基本原理の上にまとめられたもので、現在の研究の観点から見てこの構成は理想的なものだ。*SMED* からの資料一覧は特に明記しない限り、徹底的に意図的なものである。

SMED の資料は、元の課税簿は地元の人々によって記録されたものであり、したがってその名称は現地の発音を反映しているという前提で収集されたものだ。*SMED* の発表後、この仮定に対して厳しい疑いの声が上がり、とりわけ McClure は Kristensson の典拠が実際のところ元々の地方の課税簿ではなく、「税務署長の書記によって『州の』帳簿に複写されたもの(McClure 1973: 188)」の要約だと指摘した。また、Kristensson は異なる書き手を記録していない。そのため、この帳簿の言語学的な信頼性は「複写ミスの可能性、そして(中略)書記の影響が記録簿の信頼性を 2 段階で妨げている可能性(1973: 188)」次第である。McClure は複写ミスは稀なものではなく、「州の帳簿係は地元の用語体系に特に馴染んでいる訳ではなかった(1973: 190)」とし、そして書記の影響は多くの綴りのバリエーションを招いたと論証した。主要な点については(1973: 191)

「専門的に訓練された書記は中世社会において流動性のある人々だった。(中略)税務署長の書記のいくらかは地元の用語の中で初步的なミスを犯しているという事実は、臨時課税簿の中の綴りは例外なく地元の言葉遣いの典型だ、とあまりに安易に推測しないよう私たちに警告しているはずだ。」

Kristensson の返答は McClure の最も厳しい主張の論破を試みているが、彼はある程度の懷疑的な態度は健全であり、そして地元の課税簿を「州の帳簿の対応している部分」と比較する必要があることを認めている。これが Kristensson が次に行ったことで、綴りの食い違いを(a)書記のミス、(b)正書法の異形、(c)「州の帳簿係の綴りの慣習に則った(1976: 55)」統一された綴りという 3 つのカテゴリーに区別した。Kristensson はカテゴリー(a)と(b)は中英語のテキスト全てに生じるものであるので、私たちが扱う必要ないと主張している。統一された綴りに関して言えば、それらは(州の帳簿係の一部で)地元の帳簿に見られる様々な形式の修正だと言える。Kristensson はそれは「ほとんど読み書きができない人」によって、「彼らが『聞いた』または『聞いた』と思ったことを書いて(1976: 56)」記録されたと主張している。しかし元の課税簿はほとんど全て欠けているので、もし現存する州の帳簿が標準化された綴りを表しているとすると、それは確かに妨げになる(標準化への訴えは現時点において時代錯誤ではあるが)。その

ような綴りは、*SMED* のまさに基盤となるはずの『その土地の話し言葉』を曖昧にしてしまうからだ。だが Kristensson と McClure は州の帳簿における綴りの変化は、その名称に含まれた異なる発音を暗に意味している訳ではなく、またしたがって「異綴りの存在は、一つの地域の音韻体系についての幅広い一般化に深刻に影響しそうにない(1973: 190)」ということに同意している。Kristensson(1976)は固有名詞の資料の綴りは、文語の資料よりもその土地の発音についてのより良く、より確実な典拠であると結論付けた。というのも、固有名詞の資料に見られる(a)は形態の『俗語性』を考慮しないはずで、また(b)の固有名詞の資料はしばしば法的文書に現れ、その正しさに疑問を招くことを避けるために正確な発音を反映しなければならないからである。

したがって、Kristensson は残念なことに、カーペットの下の意見の相違を一掃するようだ。加えて、非標準的な綴りやその音声の包含するものが Kristensson の以前から抱いていた地域的な分布のアイデアに沿わない時、それらは書記のミスでも近隣方言からの影響の提示であっても排除されがちである(cf. Hudson 1969: 69)。別のケースでは、Kristensson は「影響」を当該の地域に引っ越してきた地元民以外の人々を引き合いに出している。だがそのような移民の証拠は現場においても乏しい。

McClure の最も重要な主張、及び Kristensson が一度も反論したことのない主張は、特定の点——同じ州内における——の綴りが「書記によって変わる」という事実だ。引用された例(1973: 191-2)はノッティンガムシャーにおける古英語の *hyll* 「丘」の発達形である。ノッティンガムシャーでは一般的に古英語の *y* は<*i*>になるが、*hyll* の場合は<*i*>も現れるものの<*u*>の方が優勢だ。1327 年の帳簿を綿密に調査すると、帳簿内の 2 人の書き手が異なる言葉遣いで書いていることが明らかになった。書記 A は<*Hill*>あるいは<*-hill*>(複合語内で)と書き、一方書記 B は<*Hull*>または<*-hull*>と書いている。1332 年の帳簿も同様に主に 2 人の書記によって書かれており、書記 C は<*i*>を用い、書記 D は<*u*>を用いている。しかしながら、それぞれの書記が責任を持っている郡は書記 A と B で一致しないため、1332 年の帳簿における<*i*>対<*u*>の分布と、1337 年の帳簿におけるそれは異なっている。

これは書記が「彼らが聞いた音を書いた」という観点や彼らが真にその地域の発音を記録したという観点にとって衝撃的なものだった。むしろ、彼らはその地域に起源を持つ未知の書記であった可能性があり、彼らが固有名詞の資料を記録している時に、音素よりもむしろ形態素を置き換えたのかもしれない。少なくとも、書記や写字生がある名称を聞いた時、また語彙素を認識した時それを自分の母語の形に同化させる可能性が残されている。LSR の言語は定義によって正確に現地化されているという Kristensson の原理は、単なる真実ではない。彼らの言語は確実に現地化されているものとそうでないものがあるが、*SMED* から抽出された資料が一般的な英語の音韻史に関して役に立たないという意味ではない。非標準的な綴りはその土地の起源に関わらずそこに存在し、また説明される必要があるのだ。もし地域方言の形が整然としたやり方で変化し——そしてその証拠が大部分においてそうである場合——そのような綴りの出どころに関して充分な情報に基づいた推測を行い、それらについて価値のあることを言うことがまだ可能である。